

海舟日記 第四冊

資料番号 94201700

法量 縦一八・五cm×横一二・八cm 全一〇〇丁（墨付一〇〇

丁）

「金花堂」銘黒野紙を料紙とし、薄茶色の表紙を付けて袋綴じさ
れている。

元治元年（一八六五）七月十日から慶応元年（一八六六）八月二
十七日（二十八日は日付の記載のみ）の記事を収める。

第四冊にも、「海舟日記抄」編纂時に抄出箇所を指示したとおも
われる付箋が数枚残っており、その記載内容は、本文上欄に掲載し
た。

元治元年七月九日で終わる第三冊を受け、元治元年七月十日から
書き出される。時に海舟は大坂と神戸の間を動いており、佐久間象
山の暗殺さらに禁門の変と、激動する京都の情勢を伝え聞き、記録
にとどめている。とくに禁門の変については、後から情報を得たと
思われる京都の様子を記した下げ紙を本文の上に貼付し（口絵写真
3）、さらに上欄には海舟が収集した京都の風評や書付の写し等が
多く補記されている。またこの時海舟は、「御急務」と題して、長

州の残党狩りよりも、京都への米穀輸送路の確保のため物流の要で
ある大坂を押さえることを優先させるべきことを述べた建言書を日
記に記している（元治元年七月二十二日条）。

その後海舟は、禁裏守衛総督一橋慶喜の命を受け、四国艦隊の下
関砲撃を止めるため豊後姫島へ赴いた。日記によると八月十四日に
海舟は姫島へ到着するが、この時はすでに休戦した後で、海舟は現
地の状況を聴取して兵庫へ帰った。

禁門の変後、江戸では、老中諏訪忠誠らいわゆる復古派の閣老が
実権を握り、文久改革期の政治体制を否定し幕権強化の動きが進ん
でいた。江戸の軍艦組の内部でも不和が生じているという様子を聞
く。九月ごろから海舟は江戸の幕閣批判を日記に記すようになる。

そのような中、九月十一日、薩摩の大島吉之助（西郷隆盛）が大
坂の海舟のもとを訪ねた。海舟は西郷に幕府の内情を打明け、この
ままでは瓦解の近いことを語った。西郷および薩摩藩の方針転換に
決定的な影響を与えた有名な会見である。

神戸海軍操練所および海舟の神戸の海軍塾も、塾生の風紀の乱れ
等の問題を抱えながらも、六月に幕府から三千両の資金が支給され
（元治元年七月晦日条）、九月晦日には操練所の門の上棟までこぎ
つけた。また、明石藩からの入塾（同年九月三日条）と久留米藩か
らの入塾（同年九月十三日条）の記事がみられる。一方、禁門の変
後、朝廷が下した長州征討令を受け、幕府が任じた征長総督尾張藩

前藩主徳川茂徳が十月十五日大坂入りし、海舟は軍艦の手配等に走り廻される。そのさなか突然、十月二十二日江戸帰府の命が下り、海舟は陸路で江戸へ帰った。日記上欄には、その道中で海舟が詠んだ和歌が記されている。帰府後の十一月十日、海舟は軍艦奉行を罷免され、勤仕並寄合となった。十一月の人事で江戸の軍艦操練所では同役の矢田堀景蔵をはじめ荒井郁之助・伴鉄太郎らが排除され（同年十一月二十三日・二十五日条）、神戸海軍操練所の廃止が海舟のもとに伝えられたのは、年明けて元治二年（慶応元年）三月十八日のことであった。

その後、慶応二年五月に再び召し出されるまでの間は、海舟にとって政治的空白の時間となる。日記には、海舟が神戸に持っていた知行所を蔵米に引き替える手続きや、高家に対する年始の進献など、幕臣としての事務や儀礼の様子が具体的に記される。

しかし閑居とはうらはらに、江戸の海舟の塾は入塾者が増加して塾内が手狭になり、塾生の中には町家に住まいを借りる者も出てきた（慶応元年閏五月二十四日条）。薩摩・越前をはじめ諸藩士が相変わらず海舟のもとをおとずれ、政局をはじめさまざまな情報を提供する。誤報も多いが、対馬藩の藩内抗争や長州藩の動きに関して海舟が得た風説が記され、長州藩の村田蔵六（大村益次郎）がサンフランシスコへ渡ったという噂（慶応元年正月十四日条）が当時あったことも興味深い。水戸天狗党の動向についても関心を持ち、情

報が入るとその顛末を記している。

また閑居中の海舟の行動で注目されるのは、二つの出版物の刊行への関与がある。一つは慶応二年初頭頃に出された開成所版「万国公法」（清国版からの翻訳）で、その版元は万屋兵四郎であった。万屋兵四郎こと福田鳴鷲（敬業）は西洋書籍の漢訳版を多く発行した書肆で、海舟との親交が深い人物である。その刊行に閑居中の海舟が関与していることをうかがわせる様子が、慶応元年六月から同二年前半にかけての記事中にみられる。本書は、松平春嶽をはじめ久留米藩・対馬藩等海舟と交流のある諸藩に配られた。もう一つは「海軍括要」で、慶応二年三月頃出版に関する記事がみられる。これも翻訳本で、発行は海舟の赤坂の私塾「氷解塾」、版元は日記の記述から江戸の和泉屋善兵衛と思われる（国立国会図書館憲政資料室に校正本の一部が所蔵）。本書は、慶応二年三月二十四日和泉屋から七五部が納められ、校正本が開成所へ提出された。そして海舟は、久留米藩や肥後藩、薩摩藩等諸方面に本書を配布している。

なお日記中には、長崎にいる海舟の愛妾梶くまが、海舟の子梅太郎を出産した報せを受けた記事（元治二年正月二十二日条）や長男小鹿が開成所の数学世話心得になった記事（慶応元年七月八日条）など、プライベートな記述も散見される。

〈付属文書について〉

和訳覚書写 二枚 (口絵写真4参照)

縦一九・一cm×横二七・二cm

「海舟日記」第四冊中に挟み込まれ、二枚の「二」銘青野紙に墨書で片仮名交じりの和文が記されている。内容は、西洋諸国が日本との通信を望むのは互いに交易によって国用を助けるためであり、そのルールを定めるための条約締結であること、しかし日本はこれを遵守しないどころか横浜鎖港の通告や「長門之大名」(長州藩)が下関で洋船への砲撃を行ったのは言語道断であり、これをただちに停止し、長州藩を処罰して下関の通航を認めることを要求している。さらに、西洋諸国は忍耐も限界で、日本がもしすみやかな処置をしなければ、力をもって条約を再定することとし、条約締結権を「大君」(将軍)か「皇帝」(天皇)か「大名之衆論」のいずれが持つか日本がみずから決定しその回答を待つと通告している。

本文書は、海舟の自筆ではないとみられ、作成された時と場所についての情報は一切書かれていない。しかし文面から、おそらく元治元年春、下関砲撃事件への報復のため長崎に入った英仏米蘭の四国艦隊を抑えるために、海舟が長崎へ派遣された時の交渉記録の一つと考えられる。「海舟日記」第三冊によると、海舟は三月二十三日に長崎入りし、長崎奉行とともにオランダ・アメリカ・イギリス公使と交渉し、その結果砲撃の二か月延引の約束をとりつけた。本

文書は、海舟が交渉した相手国公使のいずれかの発言ないし文書を和訳して記したものであると考えられる。

本文書は、その内容から、元来は第三冊に付属するものであったと思われるが、当館に収蔵された時点では第四冊に挟み込まれていたため、現状のままとした。

なお、第四冊に付属していたと思われるものとして、勁草書房版『勝海舟全集』第一八巻口絵写真に掲載されている資料がある。これは「京都大火之略図」と題する瓦版で、禁門の変でおきた大火の状況と被災の範囲が報じられている。写真説明では海舟が「日記」に挿入しておいたものと記しているが、当館が収集した時点ではこの瓦版は伝えられていない。

海舟日記 第五冊 資料番号 94201701

法量 縦一八・四 cm × 横二二・八 cm 全一五〇丁(墨付二三二丁)
無銘青野紙を料紙とし、茶色の表紙を付けて袋綴じされている。

当館による収集時、「海舟日記」全二五冊のうちこの第五冊が、虫損・破損の状態がひどく、もっとも損傷が激しかった(口絵写真6)。このため、欠損による判読不能な箇所がいくつかあり、その部分については「海舟日記抄」の記述をもって補った。また、修理前には、表紙の後に後補とおもわれる薄紙がかけられその上に糸綴じされていたが、修復時に薄紙は撤去した。

第五冊にも、「海舟日記抄」編纂時に抄出箇所を指示したとおもわれる付箋が数枚残っており、その記載内容は、本文上欄に掲載した。

前冊に引き続き、海舟は江戸で閑居中である。その間、慶応元年(一八六六)五月に長州再征のため進発した將軍家茂と京坂の政局、長州の情勢に関する情報が入ってくる。とくに門人佐藤与之助からと思われる大坂からの報告は、しばしば日記にみられる。十月、友人から家茂の辞任騒動の風聞に接した時には、海舟は將軍をそこまです追いつめた政治状況への悲憤の思いを日記に綴った(慶応元年十月十二日条)。明けて慶応二年二月初日、海舟は薩長同盟が結ばれたことを聞いた(同盟の成立は正月二十一日)。

慶応二年の夏は、第二次長州戦争の影響による米価の高騰で、江戸をはじめ各地で打ちこわしの騒動が相次いだ。日記中にも江戸の打ちこわし(慶応二年五月七日・二十九日、六月初日・二日条)の記事が見られ、また大坂からの来翰中に兵庫・大坂の打ちこわし(同年六月二日条)の様子が記されている。

そのような中、五月二十八日海舟は登城命令を受け、軍艦奉行に再任された。彼に与えられた任務は、上坂して長州再征をめぐる会津・薩摩藩との間の確執を調停することであった。海舟は六月二十二日に着坂し(江戸から大坂への移動中の六月十一日から二十日条は記載がない)、上京して両藩との調停に奔走するとともに、閤老らに対し征長問題への提言や幕府内の現状に対する建言書を数度にわたり上呈した(なお、この時期の事績と建言の内容は「海舟日記抄」中の「建言始末」と題する巻に収められている)。しかし彼の建言に対し、閤老らは耳は傾けてもこれを採用することはなく、失望した海舟は日記の中で辞職の思いをたびたび記すようになる。この頃將軍家茂は重病におちいり、七月二十一日ついに大坂城で薨去した。

六月に戦端が開かれた第二次長州戦争は、幕府側の敗色が濃厚となり、九州の幕府軍を指揮していた老中小笠原長行が小倉から逃げ帰った直後の八月十六日、一橋慶喜は海舟を召して停戦の使者に立つよう命じた。海舟はただちに芸州へ向かい、九月二日宮島で広沢

兵助（真臣）・井上聞多（馨）ら長州藩側と会見をおこなった。その間の状況は、日記中多くの紙幅を割いて記録されている。

使命を受けた時、海舟は慶喜に今後の方針を「衆議御採用」（慶応二年八月二十五日条）とする旨を確認し、京都を発った。しかし、宮島滞在中の八月晦日に知らされた勅命は、將軍薨去のための一時休兵と「侵掠之地」を引払うべしという、幕府側の一方的な内容であった。帰着後、憤懣やるかたなく、致仕東帰の念がつのる在京の海舟のもとに、江戸から送られてきたのは、八月におこなわれた幕府留學生の選抜試験に長男小鹿が声もかけられず選から漏れたことと、次男四郎危篤の報せであった（慶応二年九月二十六日条）。慶応二年四月幕府は留学のための海外渡航を正式に許可し、海舟は小鹿と四郎の留学希望を申請していた。小鹿が排除された理由について、海舟は自分が幕府内で忌避されているからであると考え、その後これを見返すかのように私費を投じて小鹿を米国留学へ送り出すこととなる。

慶応二年十月帰府命令が下り、十六日海舟は江戸に着いた。その後の日記は記事が大きく減り、海舟の失意の様子がうかがえる。この頃は、海軍局での業務関連記事の他、孝明天皇の崩御や徳川昭武の渡仏に関する記事が目をひく。

その他、家庭内に関する事項では、梅太郎を産んだ長崎の愛妾棍くまが死去した報せを受けた記事（慶応二年四月二十九日条）や、

同年六月の次女孝子の縁組に関する記事等がみられる。

なお、巻末裏表紙の見返しに、「丙寅六月より入費大概」とした一文が残っている。慶応二年（丙寅）六月は海舟が上坂した時で、留守中の家族へあてた生活費等を記したのかと思われる。

〈付属文書について〉

a 「大谷五介」名刺 一枚（口絵写真9参照）

縦一八・〇cm×横三・二cm

第五冊中に挟み込まれている。上部が大きく余白となっており、その部分が山折りされている。名刺に記される大谷五介の人物と年代については、ともに不明。

b 墨書紙片 一枚（口絵写真9参照）

縦一三・〇cm×横五・七cm

後年（明治期）と思われる海舟の自筆で「將軍薨去 長州使命之件」とメモ書きされている。おそらく日記中、慶応二年七月二十日に死去した將軍家茂の発喪が八月二十日におこなわれ、これに先立つ八月十七日に海舟が一橋慶喜から第二次長州戦争の停戦調停を命じられて京都を発つくだりに挟み込まれていたもので、あるいは後年に海舟が「断腸之記」等自身の事績に関する著作をおこなったおりの参考に日記を使用した形跡ではないかとも考えられる。

なお、「海舟日記（一）」と同様、本冊も本文の下に可能なかぎり人名に関する注をほどこした。人名注の作成にあたって利用した主な参考文献は以下のとおりである。「海舟日記」に登場する人名は、幕臣についてはさまざまな事典類が刊行されているため、かなりの程度比定することができたが、編集者の力不足でとくに諸藩士については不明な箇所が多く残った。維新史研究者をはじめ郷土史研究等各界からのご教示を乞う次第である。

なお人名のうち、奥平耆岐については、慶應義塾福澤研究センター西澤直子氏のご教示を得た。

〈主な参考文献〉

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』（吉川弘文館）

木村礎ほか編『藩史大事典』全八巻（雄山閣）

藩主人名事典編纂委員会編『三百藩藩主人名事典』全四巻（新人

物往来社）

家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典』全七巻（新人

物往来社）

東京大学史料編纂所編『柳宮補任』全六巻（大日本近世史料 東

京大学出版会）

深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』三四～三

六（東洋書林）

小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典』全六巻（東洋書林）

東京大学史料編纂所編『維新史料綱要』五～六（東京大学出版会）

維新史料編纂会編『維新史』附録（吉川弘文館）

末松謙澄編著『防長回天史』第四編上～第五編下

『南紀徳川史』八（復刻版 名著出版）

福井市編『福井市史』資料編五

鶴久二郎・古賀幸雄編『久留米藩幕末維新史料 明治二年殉難十

志士余録』

富田仁編『海を越えた日本人名事典』（日外アソシエーツ）

日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版）

石附実著『近代日本の海外留学史』（中公文庫）

慶應義塾図書館編『木村撰津守喜毅日記』（塙書房）

山崎正董著『横井小楠伝』（日新書院）

佐藤政養遺墨研究会編『政養佐藤与之助資料集』

米崎新一著『赤松小三郎先生』（信濃毎日新聞社）

浅井壽・上野利三編『竹斎日記稿Ⅰ』（松阪大学地域社会研究所

報別冊一）

中金武彦著「奥平耆岐覚書」（『福澤手帖』第七八号）

中金武彦著「奥平耆岐から中金正衡へ」（『福澤手帖』第八〇号）

高原泉著「開成所版『万国公法』の刊行―万屋兵四郎と勝海舟を

めぐって―」（中央大学大学院研究年報第二九号法学研究科篇）

（落合則子）